

業者により大量に沖縄へ持ち込まれた生きたヘビの数

勝連盛輝・西村昌彦・長田悦朗*・**・大浜勝*

Numbers of Snakes Arriving Alive in Mass into Okinawa by Traders

Seiki KATSUREN, Masahiko NISHIMURA,
Etsuro NAGATA*・** and Masaru OHAMA*

Key words : Number of traded snakes, Non-native, Imported alive, *Naja*, *Trimeresurus*, Okinawa

I はじめに

沖縄県では、観光用のショーと酒の材料として、地元産のヘビにとどまらず、県内の他の島や外国で採集されたヘビが多数用いられてきた。いっぽう、県内では、1993年にコブラが連続して発見されるにとどまらず、すでに定着した侵入種のヘビが存在し、人への被害や在来種にとっての影響が心配されている¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾。ここでは、県内における復帰以降の生きたヘビの輸入・購入数を調査した結果をまとめ、これらの問題を扱うさいの基礎資料とした。

以下では、業者は50音順にあげた。

II 方法

以下に示すように、おもに調査の対象としたのは、沖縄島内へ持ち込まれたヘビの数であった。年ごとの輸入数や購入数は、大部分の場合、1-12月の間の数か、4-3月の間(年度)の数か不明であった。

調査対象種は、コブラ、タイワンハブ、サキシマハブ(八重山諸島以外の業者)、スジオ、その他であったが、じっさいに回答の対象となったのは、最初の3群であった。業者が扱ったコブラの種は、タイコブラとタイワンコブラが大部分と推測されたが、両種それぞれの数は、玉泉ハブ公園以外では不明であった。

1. 公の機関に保存された情報

国の機関においてヘビの輸入数にかんする情報の記録があるかを、那覇市の税関とヘビを扱う機関に属する数人に確認した。

沖縄県の機関では、名護保健所に残されていた、業者によって報告された資料を収集した。沖縄県の生活衛生課、南部保健所、石川保健所には、この1,2年における科単位(たとえばクサリヘビ科)の飼育個体数が残さ

れていた。これらは、これまでに各県の条令(沖縄県では「沖縄県動物の保護及び管理に関する条令」)の対象となる動物の飼育数を、県から国に報告し、総理府(内閣総理大臣官房管理室)が毎年「動物保護管理行政事務提要」としてまとめている(ただし、1996年以降は廃止)。本報では、これらの資料は割愛した。

2. 業者側から提供された情報

生きたヘビを輸入・仲買・消費する業者を対象に、1996年8月に電話連絡のあと、記入用の表を送付し、扱った生きたヘビの数をファクスまたは、電話により知らせてもらった。連絡を試みた業者は、ヘビの輸入業者、ヘビを用いたショーを行う観光施設、酒造業者であったが、準備不足のため、対象とすべき県内の業者の何割をカバーできたか不明である。また、多くの業者では、この数年の間に、事情に詳しいヘビ担当者などが交代したため、過去の状況は不明、または概略が分かるのみであった。

III 結果

1. 公の機関に保存された情報

運輸省には、ワシントン条約に記載されたヘビの輸入申請数の記録はあるが、通常この数は実際に輸入される数より多めである。

税関では、とくにヘビと分類した輸入数を記録しない。

県内では、ヘビの飼育業者が管轄の保健所へ、飼育個体数を報告することになっている。名護保健所で、1993年のコブラ騒動のさいに集めた、本部半島の観光施設における1993年以前のヘビの購入数を表1に、また、1993年以降、業者による毎日のヘビの入出数の報告数から、年ごとの購入数をまとめた結果を、表2に示す。

2. 輸入・仲買業者からの情報

(1) 喜屋武商店(那覇市)

およそ沖縄海洋博覧会(1975年)の少しあとから、コブラ騒動の少し前まで、台湾からタイワンハブと八重山

*名護保健所, ** 現沖縄県食肉衛生検査所

表1. 名護保健所が1993年に集めた資料に基づく、本部半島の観光施設による 1993年以前のコブラとタイワンハブの購入個体数.

	コブラの個体数		タイワンハブの個体数		
	1989年-1993年3月	1989年	1990年	1991-1993年3月	
伊豆味パイナップル園	98	0	0	0	
沖縄フルーツランド	1380	37	30	0	
名護パイナップル園	318	77	78	0	
やんばる亜熱帯園	6	0	0	0	

表2. 名護保健所にとどけられた、本部半島の観光施設による1993年以降のヘビの購入個体数. 各年は年度を示す. タイワンハブは各施設とも購入なし. 伊豆味パイナップル園とやんばる亜熱帯園は3種のヘビとも購入なし. 沖縄フルーツランドは、これら以外に奄美諸島産ハブを1994年に18個体購入. 1993年6月に、コブラの生残個体はすべて殺された.

		個体数		
		1993	1994	1995
沖縄フルーツランド	コブラ	140	0	0
	サキシマハブ	146	144	325
名護パイナップル園	コブラ	44	0	0

からサキシマハブを酒用(龍泉酒造と久米島の久米泉酒造)に入れた. 2種のなかでは、タイワンハブが多く約8割を占めた. 最盛期の4-10月ころは、2カ月に1回、500-600個体/回を扱った.

(2) 首里物産(那覇市)

およそ1972-1982年の10年間、毎年約3000個体のサキシマハブを扱い、おもにヘリオス酒造へ納入した. タイワンハブを含んだかは、不明. コブラを扱ったことはない.

(3) リドー商事(那覇市)

近年はマレーシアからのコブラ(おそらくタイコブラ)のみを扱い、資料は3年分が残っている. それによると、

1994年 2120個体

1995年 2750個体

1996年 1536個体(1-7月のみ)

を輸入した. なお、1993年6月にハブ研究室に送られたファックスで、

1991年 3649個体(一部は「中国コブラ」との記載)

1992年 3401個体

を輸入したとの報告あり.

3. 観光施設からの情報

(1) 伊豆味パイナップル園(名護市)

コブラは野外で発見された時期(1993年春)の数カ月前の冬に100個体入れ、2個体使用し、98個体は冷凍した. タイワンハブは1988年頃から約2年の間、年に3、4回、およそ100個体/回入れたのみであり、これらの大きい個体はショーに用い、小さい個体はヘリオス酒造へ回した. サキシマハブは、1978年頃(沖縄海洋博覧会よりあと)に1年のみ入れた(700-800個体/年). 一時は奄美諸島のハブも購入したが、最近では沖縄のハブ・ヒメハブ・アカマタのみを購入.

(2) 沖縄フルーツランド(名護市)

ショーに用いたおもなヘビは、開業(1980年ころ)から約2年間はハブ、その後1993年まではコブラ、その後はハブ、ヒメハブ、サキシマハブ(1993年以前から購入が続いている)、アカマタを使う. 現在外国産のヘビは飼育していない.

(3) 玉泉ハブ公園<現琉球王国村>(玉城村)

表3のように、1979年からコブラ(タイコブラとタイワンコブラ)の購入を継続中. 表3の個体数が不明の年も、ほぼ同数のコブラを購入した. タイワンハブは1995年に生きたものを購入したが、1996年からは冷凍個体の購入に切り替えた. サキシマハブは、1994年以前も、展示用として年に数匹を購入していた.

(4) 名護パイナップル園(名護市)

1987年に、すでにコブラの購入は始まっていた. この時代は、タイワンハブが購入できない時に、コブラを入れていたが、コブラ騒動の前の2年くらいはコブラのみを購入した. サキシマハブは2、3回のみ少数を購入したことがある. 1993年以降は、コブラ・タイワンハブ・サキシマハブの購入・飼育は行っていない.

(5) やんばる亜熱帯園(名護市)

コブラは1993年までに、すべて殺した. その後飼育したのは、沖縄産ハブのみで、今はまったく飼育なし.

(6) 琉球村(恩納村)

表3. 玉泉ハブ公園からの報告に基づく自社によるヘビの購入個体数. 生きたヘビの購入期間は, 1979年以降で, タイワンハブ以外は1996年も継続中. コブラの数はタイコブラとタイワンコブラの合計の数で, カッコ内はタイワンコブラの数. +は, 前後の年とほぼ同数を購入.

年	個体数			
	コブラ	タイワンコブラ	タイワンハブ	サキシマハブ
1978	0		0	0
1979	+		0	0
1980	+		0	0
1981	2033	(495)	0	0
1982	2698	(444)	0	0
1983	4656	(713)	0	0
1984	3257	(295)	0	0
1985	2444	(42)	0	0
1986	2555	(101)	0	0
1987	2867	(120)	0	0
1988	2769	(0)	0	0
1989	+		0	0
1990	+		0	0
1991	+		0	0
1992	2627	(0)	0	0
1993	2451	(733)	0	0
1994	2369	(1501)	0	0
1995	2849	(0)	349	176
飼育中	314	(0)	0	2
1996年8月				

多幸山ハブセンターから引き継いだ(1982年1月)以降は, 沖縄産のハブのみ購入して飼育. サキシマハブは, 少数の南部産の個体を購入しているが, 八重山産は含まず.

<多幸山ハブセンター(恩納村)>

復帰(1972年)頃に設立された多幸山ハブセンターは, 少なくとも沖縄海洋博覧会当時から1980年代の始めに, 年間およそ1000個体の数種類のヘビを台湾経由で入れていた(産地は不明). 多かったのはショーに用いるタイワンハブで, ついでスジオ, その他ではアオハブ, アマガサが目立った.

4. 酒造会社からの情報

(1) 比嘉酒造(読谷村)

ハブ以外にサキシマハブを購入している. サキシマハブの年間購入数は不詳であるが, 多くはない. タイワンハブを購入したことはない.

(2) ヘリオス酒造(名護市)

表4のように1970年から1988年までタイワンハブとサ

表4. ヘリオス酒造からの報告に基づく自社によるヘビの購入個体数. 生きたヘビの購入期間は, 1970-1988年で, ヘビ種はタイワンハブかサキシマハブ. ~はおよその個体数を示す.

年	個体数	年	個体数
1969	0	1981	~ 800
1970	~ 300	1982	~ 1000
1971	~ 300	1983	~ 1000
1972	~ 300	1984	~ 1000
1973	~ 400	1985	~ 1000
1974	~ 400	1986	~ 1200
1975	~ 400	1987	~ 1200
1976	~ 400	1988	~ 1200
1977	~ 500	1989	0
1978	~ 500		
1979	~ 500		
1980	~ 800		

表5. 龍泉酒造からの報告に基づく自社によるヘビの購入個体数. 生きたヘビの購入期間は, 1981-1988年. ~はおよその個体数を示す.

年	個体数	
	タイワンハブ	サキシマハブ
1980	0	0
1981	~ 500	~ 150
1982	~ 1500	~ 200
1983	~ 2000	~ 200
1984	~ 4000	~ 150
1985	~ 5000	~ 200
1986	~ 3000	~ 300
1987	~ 3000	~ 450
1988	2876	~ 580
1989	0	0

キシマハブを購入した. 1989年以降は冷凍ヘビのみを用いる.

(3) 明和物産(那覇市)

サキシマハブを, 1994年は284個体, 1995年は340個体購入した. 現在飼育している個体はない. ハブ酒を製造しており, 1980年頃から毎年, ヘビをおよそ300個体を購入してきた. タイワンハブは以前用いたかもしれないが, コブラとスジオを用いたことはない.

(4) 八重泉酒造(石垣市)

地元のサキシマハブのみ使用.

(5) 龍泉酒造(名護市)

表5のように1981-1989年にタイワンハブとサキシマハブを購入した. それ以降は冷凍ヘビを使用. 現在の飼

育数は零。

(6) その他

以下の業者は、生きたヘビを使用したことなしとの回答であった；久米島の久米泉酒造（久米島）・久米泉酒造（那覇市）・瑞穂酒造（那覇市）。

5. その他の情報

以前浦添市で営業していた観光施設全琉皮革産業は、1990年代の始めまでサキシマハブを購入し、ショーに用いていた（香村昂男，私信）。

1970年代には、各地で決闘ショーが行われ、ヘビを搬入する業者も多かった。コブラとして、タイワンコブラも用いられていた（香村昂男・野崎真敏，私信）。

以前輸入業者が、コブラやタイワンハブに混ざるなどして持ち込んでしまったヘビの処分に困っていたことがある（野崎真敏ほか，私信）。

<謝辞>

資料を提供していただいた，伊豆味パイン園内田進，沖縄フルーツランド伊是名弘政，喜屋武商店喜屋武徳清，玉泉ハブ公園（現，琉球王国村）寺田考紀，首里物産宇根底講順，名護パイン園長谷川征彦，比嘉酒造比嘉健，ヘリオス酒造西村英男，明和物産外間富雄，やんばる亜

熱帯園西谷雄史郎，リドー商事許田昇，琉球村佐久田時雄，龍泉酒造大城哲靖の各氏をはじめとする現職の方々，ならびにもとの従業員の方々，また，情報の入手時にお世話になった與那原良克・香村昂男・野崎真敏の各氏などの方々に，厚く感謝する。

IV 引用文献

- 1) 千木良芳範 (1991) 沖縄島に持ち込まれた両生・爬虫類. 池原貞雄編, 南西諸島自然保護特別事業調査報告書 No. 4, 南西諸島の野生動物に及ぼす移入動物の影響調査, 財団法人世界自然保護基金日本委員会, 東京, pp. 43-53.
- 2) 仲地明 (1993) 沖縄島南部に移入されたサキシマハブの繁殖. Akamata, 8: 1-2.
- 3) 太田英利 (1995) 琉球列島における爬虫・両生類の移入. 沖縄島嶼研究, (13): 63-78.
- 4) 佐々木健志 (1995) 沖縄島から採集されたタイワンスジオ *Elaphe taeniura taeniura* (有鱗目: ナミヘビ科) の幼蛇. 沖縄生物学会誌, 33: 65-67.
- 5) 勝連盛輝・西村昌彦・香村昂男 (1996) 沖縄諸島において本来の分布地とは異なる地域で採集されたヘビ. 沖縄生物学会誌, 34: 1-7.